

217
113

通 俗 各 綱 要 分 本

日蓮宗大檀林教頭河合日辰師講述

日蓮宗綱要

全

東京 鴻盟社藏版

日蓮宗綱要目次

第一章	總論	— 宗教は時機相應を尙ぶと — 日蓮宗は時機相應の宗旨なると — 排 他の精神の由來 — 特色……………	自一 至五
第二章	歴史	— 日蓮宗の相承 — 日蓮大士の傳 — 外部との争闘 — 各派の分流 — — 派祖の傳記 — 本宗の三大厄 — 徳川時代 — 維新以後……………	自十九 至十九
第三章	宗義(上)	— 宗名 — 所依經釋 — 判釋……………	自十九 至二十五
第四章	宗義(下)	— 總論 — 攝析二門 — 宗教五綱 — 四個格言 — 三大秘法……………	自二五 至四〇
第五章	結論	— 宗祖大師の御本志と當今本宗の狀態……………	自四一 至四二

日蓮宗綱要目次畢

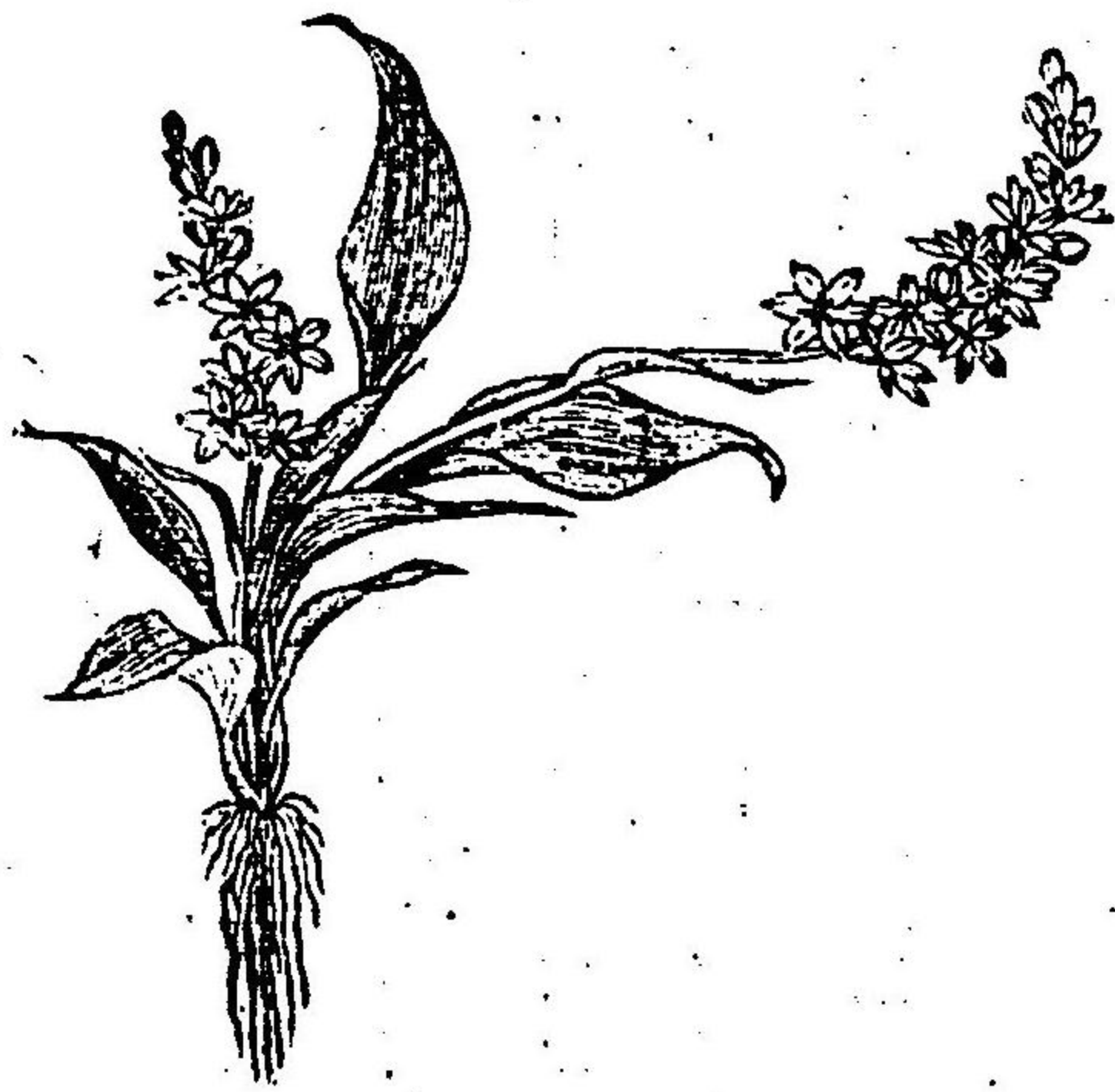
日蓮宗綱要

第一章 總論

何事をするにも時を撰ぶとが最も肝要であるとは今更申すまでもないものであるが特に宗教に至りては時を充分に見計つて布き始めないと毫も効益がない全く無益の業となるものである併し時とは何かと云へば其時代の時代とは人間が作るものであれば時機相應と申すのは早く云へば其時代の人氣に協ふ機にするると云ふとであります然らば何故時機を見計らばなければならぬかと云ふに凡て宗教の如きものは人間を目的として起つたもので草木動物の成佛も論ずるが主として謂へば人間が第一の目的である何れでも巧妙の手段を用ひて其時代の人等を善き道に導くのが本意であるから極智慧の淺い人ばかり澤山居る所へ極高尚な困難しいとを話して聞かせたとしても何が何やら解らぬので寸毫も効が見えないとは當然な話此に反して非常に智慧の進んで居る人等の處へ餘り淺薄なとを説いたならば今度は聞者も無く初めから馬鹿にして少しも拜聽せぬ様になるであらうされば昔から今日までに種々の法を説きになりたる各宗各派の祖

日蓮宗綱要 第一章 總論

河合日辰講述



日蓮宗綱要

第一章 總論

何事をするにも時を撰ばずとが最も肝要であるとは今更申すまでもないものであるが特に宗教に至りては時を充分に見計つて布き始めないと毫も効益がない全く無益の業となるものがある併し時とは何かと云へば其時代の時代とは人間が作るものであれば時機相應と申すのは早く云へば其時代の人氣に協ふ様にすると云ふとであります然らば何故時機を見計らばなければならぬかと云ふに凡て宗教の如きものは人間を目的として起つたもので草木動物の成佛も論ずるが主として謂へば人間が第一の目的である何れでも巧妙の手段を用ひて其時代の人等を善き道に導くのが本意であるから極智慧の深い人ばかり澤山居る所へ極高尙な困難しいとを話して聞かせたとしても何が何やら解らぬので寸毫も効が見えないとは當然な話此に反して非常に智慧の進んで居る人等の處へ餘り淺薄なとを説いたならば今度は聞者も無く初めから馬鹿にして少しも拜聴せぬ様になるであらうされば昔から今日までに種々の法をお説きになりたる各宗各派の祖

日蓮宗綱要 第一章 總論

河合日辰講述



師方は大抵時と云ふとに重きを置いて衆生の濟度にも手を付けられたのである。現在我佛敎の開祖たる釋迦牟尼佛ですら、ヤハ、ハ、此時機に乗じて敎を弘められたのである。若し我釋迦牟尼佛にして時機を得られなかつたならば所説の法は如何に甚深微妙であつたにもせよ、逆も今日の様に佛敎を盛にするとは出来なかつたであらうと思ひます。斯の如く時機を見るときは宗敎に必要であるのじやが吾日蓮宗の如きは何であらうと申すと實に能く其時機に相應して居るので佛敎各宗中、此宗の如く時機に相應した宗旨はあるまいと思ひます。併唯斯様に申したばかりでは、何やら手前勝手などを謂ふやうでありますから少し詳しい説明をせなければなりません。さて、此事の最も能く解るのは本宗に於て立つる所の五綱と云ふとの話をするのが、何より簡明なとかと思ひます。五綱とは、敎機、時、國、序の五つで、是から其説明を致しませうと思ひますが、茲で詳しいとを説くよりは、後の敎義の方へ往つて話をした方が便利であると信じますから、一寸一口謂つて置けば、敎即ち佛の敎へで、此佛の敎への中で何が一番貴いかと云へば四十餘年未顯眞實の法門を始めてお示しになりましたる法華經が一番貴いとは明かな事であり、又機即ち聞者の根性を計つて見るに、日本の現今の人々は佛の滅後二千餘年を経て、當に末法の機であるから、末法の時に流布すべしと佛の説かれたる法華經を受くべき根機であるとも、亦明かであ

る。又時を考へて見れば、後五百歳の今日ゆゑ是正しく、妙法蓮華經廣宣流布の時であり、す。夫から國に付いて考ふれば、聖德太子や、傳敎大師のお説きなされたる通り、日本國は一向大乘の國である。然るに其大乘中の最も勝れたものは、法華經であれば、取も直さず、日本國は法華經の流布せらるべき國であります。次に序とは即ち敎法流布の前後を論ずる意味で、小乗の後に權大乘、權大乘の後に實大乘と如斯順序を立つるのが當然の方法であります。から、日本國は昔時欽明天皇の時に百濟から佛法を傳へた後、桓武天皇の時に至るまで俱舍成實等の小乗敎や法相三論等の權大乘敎を弘めて了はれた後に、日本天台宗の第一祖たる傳敎大師が實大乘たる法華經を流布したのは至當の順序であると云はねばならぬ。然るに他の禪とか、眞言とか、淨土とか謂ふ、實大乘以下の諸宗が出て來て、敎勢を振はうとするのは、實に順序次第を誤りしものである。乃で、我宗では敎法流布の順序に隨つて、此甚深微妙の法華經を弘むるのじや、斯く、五箇條の理由があれば、要するに佛滅二千年の後、末法の初より以後、一萬年程の間、此日本國は當に法華經の力に依て安心を得之に依て保護せらるべきものと定まつてあるのじや、されば、吾祖日蓮上人が、非常の熱心を以て他宗の不倫を打破し、我宗の眞實宗門を宣布するに勉められたのは、眞に自己の熱心と、日本の人民等を憐れむ所の慈悲心に勵まされた結果である。世の徒に日蓮宗を攻撃して得

意がつて居る人たちは、自ら深く願て、我宗の本意を研究せらるゝが肝要である。然る處、一方から謂へば天台の傳教大師が實大乘たる法華經に依て、數百年前に開宗せられ、天台宗も、日蓮大士の出世の當時にあつたものじやから、何も別に我宗祖が一宗を開く必要は無いでないか、唯傳教大師の志を紹いで天台宗の興隆を圖つたらば夫で宜つたらうと云ふ議論も起るかも知れませぬが、之は一言辨じて置かなければならぬとである。第一に天台と我宗と異なる所は一寸數へて見ても八種の區別があります(十異等は略之)

當家(天台) 迹化。 像法。 攝受。 一部。 理性常住。 脫益。 本已有善。 權實双用。

異議

要點(當家(日蓮)) 本化。 未法。 拆伏。 唱題。 事相常住。 種益。 本未有善。 但令用實。

此だけの區別がありますから、之を委しく話せば宜いのであるが、今若し之を謂はうとすれば、中々深い教義を話さなければならぬから一口二口の説明を與へて見れば、ツマ、天台は未法の時に弘むべき法華經を像法の時に開いたのである、即ち時に於て非常の異義がある、又天台の方では外の宗旨のとを攝り込みて、自分のものとして往く、我宗は厭くまで他宗を嫌うて、獨り本門法華の妙義を立て、往くのだから、第一の方針が違つて居りま

す、又教義の上にも、台家に於ては、理体事用と申して、理性常住の三千の諸法を理体不變のものとし、事相所現の三千の諸法を事用としてある、然るを我宗にては左様などは云はず、事相の上に顯れたる十界三千の依正が其儘直に實体であるとして觀じて参りますから、即ち事体理用である、之は觀法の上の大相違の點であります、又實行の上にては、天台は三千三諦の妙觀を用ひ本宗に於ては南無妙法蓮華經を唱へます、又天台にては壽量品の五百塵點劫の數を一邊と解釋致します、故成佛有始に墮ちて非常の缺點があれど、本宗にては之を無量無數としますから成佛無始であります、又五百の數を天台家にては但た佛の壽命とばかり致すけれども、吾宗にては十界の壽數であると立てます、ア此様な風に列べて往けば實に無數の異點があつて、容易に盡すとは出来ませぬ、夫故單に、本宗は天台宗よりば一步進めて、未法の世を濟度するに、最も適當なるものであるゆゑ、吾祖日蓮大士が彼等の諸宗を却け、天台の立義の上に、一機軸を出して、本宗を開かれたのであると云つて置けば、粗本宗建立の意は顯れたものであると信じます、餘り總論の長いのは、本文の妨害であるから宜い加減にして置きますが、諸君に前以て願つて置くと、本宗は諸宗の後に出で、日本的佛教として儼然たる地歩を有し、日本と云ふ國家と、佛教と云ふ宗教との調和を計り、以て國の爲に盡さうと云ふばかりではない、開祖上人の御決心では、未法萬年を

期して此宗門を宣布せやうと云ふ大決心であるから、本宗は將來に於ても益々其教線を擴張し、以て開祖上人の眞意を紹ぎ國家の爲に佛法の爲に大に盡力する義務を負うて居るものである。されば吾宗の眞の抱負を吐露せば唯是法門の力を以て佛教を統一したい、佛教全部を法華の一門に歸入せしめて會三歸一の妙味を宇宙間の人々に知らせたいと云ふのが抑々本宗の本意である。之を御承知になつてから本宗を觀察せられたならば、或一部の人の様に偏狹なる頭腦を以て本宗を罵詈する機などのあるべき筈はあるまいと思ふ。物事は凡て深く其本意を見て然る後批評なり攻撃なりすべきもので、徒に自分の偏見からした批評や罵詈は全く無意味のものじや、識者たるものは詳に之を念頭に置かるゝが必要であると思ふ。

第二章 歴史

序言——是より進んで本宗の歴史を述べやうと思ふ。併し之を敘するに批評的に敘ぶると信仰的に述ぶるとの二様がありまして、何でも日蓮宗の祖師方を此上もない方として話をすると單に佛教中の一偉人として話をするのは、餘程機子が違ふのであるが、今は専門的に信仰的に述ぶると、批評的に通佛敎的に述ぶるとの中間を取り、極めて簡單

に且つ切適に話をして往かうかと思ひます。

起原——さて、本宗の起原とは何を指すのであらうかと言へば、吾が佛教の開祖たる釋迦牟尼佛が四十餘年の御說法の終に於て、お説きになりましたる御自身の御本懐たる法華經廿八品是が抑々本宗の今日に至りし第一の要素で、此甚深なる妙法蓮華經を傳へて、今日まで教を宣へて參るに付き、茲に二つの相承があります。之を、本宗にては、内相承と外相承と申しまして、餘程重いとであるが、抑々外相承と云ふのは、印度、支那、日本の此の三國に通じて一乘圓頓の法華の妙旨を傳へられたるお方々を祖師と致し、一道の系譜を立てたもので早く云へば、外面的傳承と申すべきである、今其圖を示さば、

●本師釋迦牟尼佛(述門附屬授職灌頂)——述化藥王菩薩(天竺授職灌頂)

天台智者大師(支那授職灌頂)——敎山傳敎大師(日本授職灌頂)

日蓮大菩薩(末法授職灌頂)

マツ斯様の系圖で、本師釋迦牟尼佛より、我宗祖日蓮大菩薩に至るまで、前後四代目である然るに内相承の方に參ると、是は眞個の内證の話であつて、門外の者や餘宗の人師の知つたのではない、但法華經の中の法師品と神力品の二品の中に佛様が詳さにお説きになりたるお辭に従ひ、本門内證眞實として、佛様が御出世遊ばされたる本當の御本意を殘らず御

傳へになりましたもので此時には、迹化の藥王菩薩や、支那の天台大師、日本の傳教大師などは、全く數へませぬ、即ち、

●本師釋迦牟尼佛(本門附屬授職灌頂)——本化上行菩薩(天竺授職灌頂)

「日蓮大菩薩(日本授職灌頂)」

此の通りであります、即ち外相承には紹介者があれど、内相承は極直接で、毫も紹介者の手を借らず直に傳へられたのであれば、本宗の正意は勿論内相承にあるのでございます、尤も深く高祖上人の本地を尋ねて見れば、本有常住の妙身、本有常住の妙土に於いて、無始以來自受法樂の境界を現起し、暫らくも斷絶するところがないのである、さりながら其様なことを只今は陳べて居られませぬから、本地のとは後日に譲り、唯垂迹示現の上で、日蓮大士の零傳を茲に少く述べませう諸君も大抵御承知のとであらうが、宗祖日蓮大菩薩は藤原鎌足公の御子孫でございます、初、鎌足公より十二代目の共資と云ふ方の時に京都を去りて、遠州の敷智郡と云ふ處へ移られました、夫より六代を過ぎ、政直と云ふ人の代になりました、更に山名郡の貫名と云ふ村に住居を移し、之か爲に姓を改めて貫名と申しました、夫から又、其政直から四代目に重忠と云ふ人が在つた、此時に、何か故があつて房州の小湊と云ふ處へ流されましたが、此小湊に流された重忠と云ふ人に五人の子が

あつて、其第四番目の子に善日磨と申す方が御座います、之が取も直さず、吾宗祖の日蓮上人である、素より嫡流に遭つた位のと故充分の暮しも出来ず、或は田島を耕し、或は海中に漁業を營み、其日くを送つて居られた、夫故、日蓮上人も、われは旃陀羅の子なりと仰せられたのじやが、此も詞は勿論自ら卑下せられた御詞であるのを、或人等か無益らぬとを並べ立て、本宗を批難し、頻りに悪口を申しますが、此様なとは一々辨駁する價值もないと信じます、さて、日蓮上人の善日磨は十二歳の折に、小湊の直上の方にあります處の清澄寺に入りて、道善法印と申す眞言宗の御僧侶に付いて、學問をなされましたが、其時に名を更へて藥王磨と申され、夫から十六歳の十月八日に、忽々御剃髮の上、名を蓮長と改め、字を是生と申されたが、其翌年から諸國を歴訪致すとに決心せられ、先づ鎌倉に入り、其折に丁度鎌倉へ來られたる叡山の尊海と云ふ方、方に連れられて、京都に上り、叡山に入られたが、此間の御苦學は實に非常なもので、藏經を三度も御覽になつた、たそうであるが、其頃の天台學は、餘程別途へ走つて、日本天台の開山たる傳教大師の御本意を失ひ、其法孫たる慈覺大師等の立義を用ひて、眞實法華の妙旨は明かになつて居らぬ様でありましたから、日蓮大士は不審に思召され、種々と聞質して見たれど、思ふ様でなかつた、夫より一度山を下りて、臨濟宗の圓爾和尙、曹洞宗の道元禪師、泉涌寺の道隆和尙等に面會して、法義を談じ、又は三井

寺を訪ひ、或は南都、高野山等を扣いて種々の法門を悟り、三十歳の時には、京都で漢學を勉強せられ、或は藤原の爲家なる人の門に入りて和歌を學び、夫から東寺に遊學して、何から何まで、殆んど出来るだけの修行をせられ、三十一歳の御時、又々叡山に歸られたが、天台の學を學べば學ぶほど、今の叡山の學風が自分の氣に入らぬので、慨然意を決して、別に一宗を開かうと思ひ、諸經の要文を集めて法華開結十卷を註し、是を懐にして房州へ歸りました、即ち、建長五年の事であるが、其年の三月廿八日に師匠等に向て少し實義を述べ、改めて四月の廿二日、三昧に入り、頻りに考へて居られたが、其月の廿八日の早朝の、とて御座います、忽ち大きな聲を擧げて南無妙法蓮華經の題目を唱ふると十遍ばかり、此時の上人の胸中は實に何とも斯とも謂へぬほどの熱火が燃えて居たらうと思はれます、其處で其二十八日に大勢の僧侶や俗人等を集め、自分の悟りたる所を少しく説き示し、併せて、四個格言中の念佛無間を第一強盛に唱へられました、四個格言とは誰も承知の、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の四句であるが、此の荒々しい四句は、明かに日蓮上人が、日本諸宗を一擲きにして丁ふ決心を示したものであるから、此説法を聞いて居たる者共は驚くと一方ならず、其地の主宰たる東條景信なる者の如きは、憤怒の餘り日蓮を斬らうとした程でありましたが、猶ほ其の志を改めずして鎌倉へ参り、名越の松葉ヶ谷と申す處へ居られて

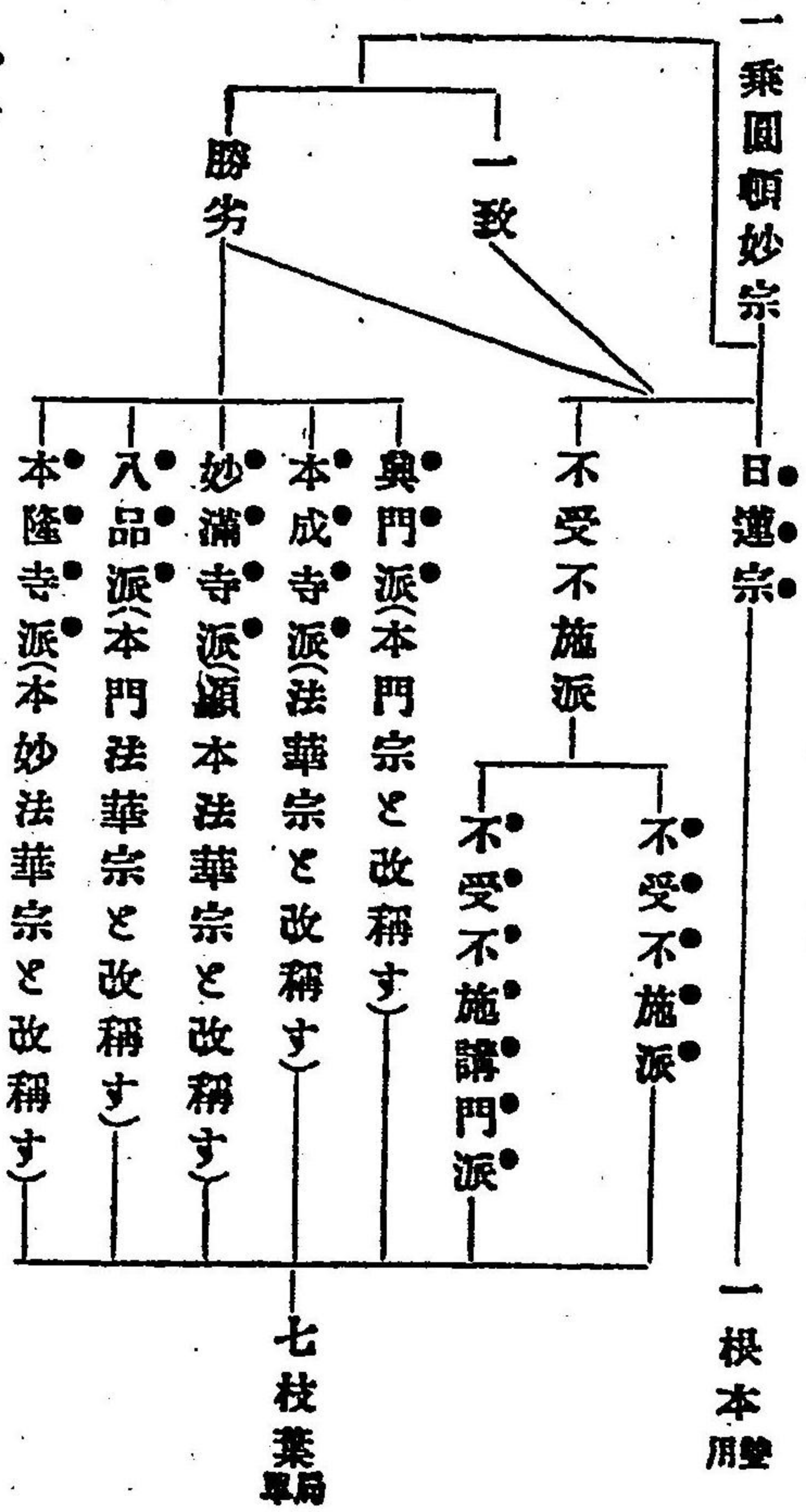
先根本大師の宗義を頻に弘めて居られました、其間に追々立派な弟子も出来て、夫より正元元年に守護國家論を作り、文應元年立正安國論を著して、佛教を以て國家を治むる道理を書き載せられ、之を其年の七月十六日北條幕府に獻じて、以て直言極諫せられたれども、其藥口に苦く、金口耳に逆ひ、弘長元年五月十二日には伊豆の伊東に竄し、文永八年九月十二日には遂に死刑に處せんとまで立至りました、嗚呼正法を修行せんと欲せば、三障四魔紛然として競ひ起る、魔起らすんば正法と知るべからずとは、蓋、此事でありませうか、さりながら、若人惡刀杖及び瓦石を加へんと欲せば、即ち變化の人を遣して、之が爲に衛護となさんとの金言に違はず、刀尋いで段々に壞れしかば止むを得ず、十月十日佐渡に遠流す乃ち依智を出で、彼の島に赴き給ふに、朝々露に泣く千般の鐵を分ち、夕々風に吟ずる一葉の松原を過ぎ、玉ふ白雪眼に過ぎり、長途迷ひ易く、青嵐嵐に徹り、遠路進み難しと雖、十二日を経て寺泊の津に着き給ひ、同廿二日に船に乗り給ひ、自我偈を誦じて、以て暴風を止め、荒浪を恬め、終に配處に着き給へば、澤深く草茂る野の中に、洛陽の蓮台野の如く、死人を捨る處あり、塚原と名く、此に小堂あり、黄葉軒を埋み、青苔柱に纏へり、佛もなく、僧もなき小堂なり、晝夜耳に盈るは松風、晨昏目に馴るは庭の雪のみ、食乏しければ命を支へ難し、衣破れたれば形蔽ひ難し、上漏り下濕ひ、簑笠を覆ひ、鹿皮を敷けり、手脚が單子に囚れて、飲食を

絶し海北に放たれしが如し、法道が徽宗に賣められ火印を焼かれ、江南に放たれしに似たり然りと雖、玉磨いて光を増し、吾祖の忠勤彌々益々確乎不拔にして、「開目抄」と申す文上下二卷を著し、以て三大誓願を記して曰く、我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず等云々と、是實に君を思ひ、國を愛するの熱腸より涌き出づる所也、後又觀心本尊鈔等の諸書を撰述して以て宗教宗致の美味を現はし、彼の立正安國論の蘊奥を示し給へば、當路の者は之を見ずと雖、佛天は行と事とを以て之を示し玉へば、但勘氣を赦免するのみならず、終に宗牒を授けて云く、「頃年數多眞法の威力、御感尤も深し、三國に無比類妙宗、後代に難有尊價、孰れの宗か比之、於日本國中宗弘不可有妨者也、依而執達如件文永十一年五月二日城左兵衛奉 日蓮大上人」と、之を以て身延山に入り、九ヶ年讀經中終に蒙古の強敵を對治し、國家をして泰山の安きに至らしめ給ふまで、斯る御艱難の後、安如として、弘安五年の十月十三日に池上の宗仲と申す方館にて御入滅になりました、拙稿は數年前少し取調べたいとがありまして、房州の眞生寺下總の法華經寺池上の本門寺等へ出張致したともありましたが、孰れも劣らぬ大刹であるが、房州の小湊と申せば、實にヒドい處である、此様な偏僻な處から而かも漁夫の子と生れて一代天下に呼號し、永く日本全國を風靡し、國中を動かしたる宗祖の御熱心の程を

思ふと、其勇氣其決心の如何にも強かつた事が思はれて、坐ろに涙の出るのを覺えなかつたです、人は親鸞を人物なりと謂ふけれども、親鸞には蓮如上人あつた爲に今の眞宗を見ることが出来たのである、曹洞宗の道元禪師も亦第四代の盤山紹瑾を得て、彼程の宗勢を得たのであります、獨り日蓮上人に至つては、全然世に反抗して四宗も八宗も皆敵とし、非常の奮闘をした結果として御自分一代で全國を動かさし、さしも隆なりし北條氏すら、之には手を下し兼ねる程にしたのは、何と感服すべきとではありませぬか、拙稿の平素愛讀します書籍の中にアラビヤのモハンメッドのことが詳しく書いてありまして、彼の熱誠を頌りに賞めて居ますが、試に日蓮上人をして彼地へ生れしめたるならば、其熱心は遂に亞細亞歐羅巴等の全部まで教勢を張らしめたるかも知れませぬ、無用の偏見を遠くして日蓮上人の人格を非議せんとする輩は更に委しく此方方を研究して下さるが善い、さて斯様に宗祖大士は本宗の教勢を充分に張りて入滅せられたが、先祖ばかりの功力にては未だ充分なとは出来なかつたのを宗祖より遺屬を受けられたる日像菩薩と申す人があつて後醍醐天皇の元亨年間に餘程勢を得終に四海唱導の號をも天皇より賜り、日蓮宗の活潑なる教理はかく一時の人々には歓迎せられたが、末世に於て注意すべきは、

各派の分出 の一事であります、マア日本今日の各宗中一番分派の多いのは、眞宗と臨

淨と日蓮の三宗であるが、眞宗は系統の上から分れ、臨濟は法系の上から分れたもので左程教理上の區別はないが、獨り日蓮宗ばかりは、教理からして違うて居ます依つて之を詳く説かねば日蓮宗の歴史が判然せぬとなり、されば、今少しく話しますれば、大約左の通りで、黒點を付したるは、所謂一源七派です。



其分派の理由を求むれば、宗祖が法華經二十八品の取扱ひに付きて、非常の相違がありますから、之に就いて立義の異なる所あるが爲めに斯く分れたので、先づ、法華經を前後二部

に分ち其前の方の十四品を述門として、佛が中間大通佛の時より今世に出でられし事情を單に中間限りに説明せられたものとし、其後の十四品を本門として無始遠々劫來の事を説て遠々久遠成佛の實義を明し玉ひたるものとしてあり、されば、其本迹の二門を宗祖は双べ用ふるのであると論ずるのが、所謂舊一致の説で、其局單に述門をば劣るとするのが、所謂舊勝劣であります。此の一致勝劣の二つの中に、一致は根本にて勝劣は枝葉であります。其の一致と云ふも他に對して名けたる事にて、自宗にては一致勝劣双用である所開る言偏にして意圖なりとは此のとございます。先根本日蓮宗から初めませうならば、(一)日蓮宗——は宗祖から續々相傳へて少しの異義もなく、目今の處にては甲斐の身延山久遠寺を總本山とし、武藏の本門寺、京都の妙顯寺、本國寺及び下總中山の法華經寺を四大本山と定め、其外にも三十九ヶの本山と末寺三千六百二十二ヶ寺あつて、日蓮宗中最も勢力ある宗旨であります。(二)興門派——は宗祖上人の御直弟なる日興上人を派祖と致します。其の本山が駿河の富士にある處から、一名を富士派とも申します。併し今度本門宗と改稱せられました本山八ヶ寺末寺は二百六十三ヶ寺あります。(三)本成寺派——は宗祖の御法孫たる日印上人を其派祖と致します。本山は越後の本成寺にあり、本成寺派と申したのじやが、今度は改稱して法華宗と名けました。而して末寺は一百八十ヶ寺と申

人が後陽成天皇の時に唱へ出したる時の如きは、當時の關白たる豊臣秀吉公が文祿四年の九月に大佛妙法院に於て千僧供養を營まれました折に各宗の僧侶を百人宛集めましたが、他の宗派の僧侶が喜んで之れに参列しました中に、日興のみは頭として不受勸施の詔を固守し、遂に其の招待に應ぜず、同月の廿五日に妙覺寺を立退いて丹波へ参りました實に其主義を遵奉する勇氣には感服の外はない加之、慶長四年に徳川家康公が千僧會を行ひました時にも出なかつた之が爲めに五年の六月を以て對島へ流されたが到頭其説を替へなかつたそうである、其から又門下たる日講上人も、寛文六年の四月に「守正護國章」を著して之を幕府に上つた爲に日向の國へ流された、斯く非常の異論を唱へて政府の主幹たる人々の云ふとも聽き入れなかつたので非常に憎まれ日蓮宗は上様のお命に背くと云ふ様などから京都邊の諸本山は大抵潰されて了ひました、ツマリ、天文の法亂と二回の不受不施騒ぎとの三つを併せ稱して三大厄と申すのであります、併し、此様な事件の起りつゝある間にも、日重、日乾、日遠等の諸師が出世せられて、布教に盡力し、之が爲に宗勢は衰へなかつたのみならず、益々進張する如き有様になりましたのは實に慶すべきことであり、ます、さりながら、
徳川時代の人物 として吾々が尊崇すべき方は深草の元政上人であります、マア近

代に於て非常に効績を有つて居らるゝお方であらうと思ふ、彼の元政上人が、諸本山の通規に依らず、自ら清規を立て、律儀を守り本宗教觀の遺奥を發揮せられたるのみならず、日本の文學界に非常の貢獻をなされたとは何人も知つて居るとであります、さて、徳川氏の政權を執りし時代も過ぎて、

明治維新以後 となるや、他の佛教諸宗の勳かされしに伴ひて、非常の恐慌を來したが、此時に當りて、最も力を盡されしは、新居日薩上人であります、日薩上人が一身に溢るゝ程の徳望を以て、維新の當時に一方ならぬ運動をなし、遂に分れに分れて居た各派を一纏めにして、同一日蓮宗の名の下に置き、自ら管長となりて巧に治めて居られたとは、誰も承知のとであるが、其後の分派を生じたと等に付き、猶話し度ともあれど、此處では、先づめて置きますやう、

第三章 宗義(上)

(一) 宗名

抑々本宗を日蓮宗と名けた所以は別段難解いともないが、本宗の所依の經典は、謂ふまでもなく、妙法蓮華經であるから、具さに謂へば、妙法蓮華經宗と申すじや、現に日蓮上人も、内

證佛法血脈』の最初などに、夫妙法蓮華經宗者云々と仰せられてあります。然るに、此妙法蓮華經の事を略して法華經と唱ふるると、天台大師の頃よりの常習で、五時の名を立つるにも法華涅槃時としてあります。夫故に、天台宗では、具さには天台法華圓宗と稱すべしと申して居りますが、本宗も實は法華圓宗と云ふべきを、宗祖御自身でも法華宗と謂はれられたに依り、且又法華宗云々の御給旨もあると故從來法華宗と唱へて参りましたが、夫では天台宗と混合の憂があるから宗祖の名を取りて日蓮法華宗と云うたので、今日に至りては、單に日蓮宗と稱し政府にても日蓮法華宗と云ふ様な稱を用ひては居りませぬが、ツマリ日蓮法華宗を略稱して日蓮宗と名けたものじやと思へば宜いのである。併し一ばんよろしいのは御給旨等により一乘圓頓妙宗と云ふべき事でございます。

(二) 所依經論

前から段々申せし如く、本宗正依の經典は妙法蓮華經八卷二十八品と、其開經即序文とも云ふべき無量義經一卷と其流通分たる觀普賢經一卷との三部であるが、此三部は天台大師も夙に採用されたので一口に謂へば法華以前の諸經を權とし法華經を實とし而かも其權を會して實に歸入せしめ今まで説き來りし諸經も、要するに佛本意に外ならずとの旨を説かれたものであります。其故に本宗にては、此三部就中法華經を以て正依と致し、其

解釋等に至りましては、天台大師の法華玄義、同文句、摩訶止觀、並びに荆溪湛然師の釋籤等を以て指南とし、且日蓮上人の註法華經と申して、宗祖御自身にも所持になつて居た三部の妙經に註を下されたものが十卷御座いまして、非常に重んじて居ります。猶此他にも、『口決』と申すものが二卷あつて、之は宗祖のお説きになつた法門を上足のお弟子たる日興上人が筆記せられたので、一名日興記とも名け是亦大切な書籍であります。夫から又登巻日向記と申す大切な口決もあり、又『高祖遺文錄』と稱するものが近年出来ましたが、之は日蓮上人がお書きになりましたる録内、録外の二部、其の外、他受用書等を集めたものにて元來、宗祖の滅後、六人のお弟子方が諸方の僧侶と相談の上、高祖の御書簡を編輯しましたが、其中で第一周忌の節に編纂したのを録内、御書と云ひ其後に集めたのを録外、御書と申します。此中には多く書簡がある處から、却つて高祖の御本意を明瞭に顯したものが多様で本宗にては一般に貴重して居ります。現に明治十七年に出来た大藏經の中にも、

- 一、立正安國論
- 二、開目鈔
- 三、撰時鈔
- 四、法華題目鈔
- 五、法界明因果鈔
- 六、内證血脈鈔
- 七、十法界鈔
- 八、總勘文鈔
- 九、教機時國鈔
- 十、本門戒躰鈔
- 十一、立正觀鈔
- 十二、觀心本尊鈔
- 十三、受職功德鈔

の十三部が入れてあります。其中の多數は、今の録内録外の御書より出たもの故本宗に

於て御書の重んぜらるゝとの一斑が分るだらうと思ひます。

(三) 判釋

本宗には佛一代五十年の説法を分類判釋するに四種の標準がある。即ち一には天台五時八教の相、二には三種の教相、三には四重異廢、四には三時の配當之だけですが、勿論此三つともに法華教を以て最上となし法華の位置から佛一代の教化を眺めたものであるとは豫め承知して貰ひたいものです。處が

一天台五時八教の相 に至つては既に天台宗の處で詳しく話してもあつたのであらうから、餘計などは申さぬが、五時とは華嚴、鹿苑、方等、般若、法華涅槃の五時、八教とは、明、漸、秘密、不定、の化儀の四教と、藏、通、別、圓の化法の四教とを總稱したので、其中前の四時及び化法の四教の中の前三教を權教とし後の法華涅槃と圓教とを實教として法華の最尊最上なるとを謂ひ願されたのじやが是等は總て天台宗の處へ譲るとまます、次に

二、三種の教相 とは第一に根性の融不融の相とて、之は法門を聽く所の衆生の方から論じたもので、法華以前四時の御説法をなさる間は衆生の根機が未だ充分に融通して居らなかつたから之を不融と名け、愈々法華時に至りては如何なる下根の者も、如來の唯一佛乘を聞くとが出来たから、即ち融通の相である。されば此一相は融不融の二つを以て

佛の御説法を明かに分つたのであります。第二に、化道始終不始終の相とは、之は少し困難いとかと思ひます。が、一佛佛機はスツト昔の過去世に於て大通智勝佛と云ふ佛機の前にて法華經を説きになり、夫から永い間を経て、今の世にも生れ下され、昔時大通佛の處で縁を結びて置いた所の人等を導いて遣らうと云ふのが、第一の御趣意であるのじやが其の機などは初から話になりても兎ても解らぬだらうと思召され、法華以前に於ては、少もお話にならなかつた、即ち化道の始終を明さなかつた、之れが化道不始終の相である。然るに法華に至りては時機も到來したと故、何の遠慮もなく明に其因縁をお示しになりました。是が化道始終の相である。即ち此一相は一代の説教を化道の始終を明すと明さぬとに依て分別したのであります。夫から第三に師弟の遠近不遠近と申すのは、法華以前及び述門に於て、未だ師、即ち佛の本地も弟、即ち聞法の弟子等の本地も明しになりませぬのを、不遠近と名け、其次に本門に至りて師弟の本地を明にお示しになりましたのを遠近と名けるので要するに此三種の教相は法華本門が、他の諸經に勝れて居るとを顯す爲に設けたものにて、前の二相に於ては法華と爾前の二つを相對して優劣を論じ、後の一相にては本門と爾前及び述門とを相對して優劣を論じたので、素より法華本門の優れたることを示すに過ぎませぬ、夫から更に、

三四重興廢 のとを話致さば、此も少々面倒とながら、一には偏圓相對と申して、爾前の華嚴阿合、方等般若の四時の中にて、藏通別の三教を總て偏とし、第四の圓教を圓とするのです。二に權實相對とは法華已前を權教とし、法華を實教とするのである。夫から三に、本迹相對とは法華經を本迹の二つに分けて、其の優劣を判ずると前の通り、四に、教觀相對とは、前の三重に於て、或は偏權であるとか、或は權實であるとか、又は本迹であるとか、論じて淺深を判じましたけれども、是等は總て、教相の上の話である。即ち教に屬するのじや、然るに夫を一步上に出て、是等の細々した議論もなく、唯我等衆生も、佛様も、皆一昧不二で、常住不滅であると觀ずるのが、本當の心の据へ處である。即ち觀に屬するものじや、試に宗祖上人が『十法界鈔』の中にも説きなされた文を引いて見ませうか。

「迹門の大教起れば、爾前の大教亡ず。本門の大教起れば、迹門爾前共に亡ず。觀心の教興れば、本迹爾前共に亡ず。これはこれ、如來所説の聖教、從淺至深して次第に迷を轉ずるなり。」

此一節の大意を味うたならば、以上、或は五時八教とか、或は三種の教相とか、或は四重の興廢とか種々と分別して判釋を明したのも、ツマリ、法華の本門が、爾前の諸經や、法華の迹門に勝れたることを顯し、又其本門の教相よりは、法華の教を悉皆吞込んで了うた所の觀心が

最も肝要である、と云ふことを示したに過ぎないことが、解りになる。で御座いませう。吳服屋の亭主が、他の店の品物を、澤山客の前に列ぶるのは、ツマリ、自分の店の品物の一番宜いことを客に知らせたい心があるから、と、本宗が種々と判釋する心も、之と同様である。さりながら、斯如申すと如何にも、本宗にては、他の諸經を斥くる様に聞えます。すけれど、法華に於ては、開會と申して、爾前の諸經を悉く、法華の妙法に會入して、了ひ、一切の經を、法華的に解釋し、終るのみで、何も是等の諸經を無用視する譯ではないから、此邊は特に注意して置いて貰ひたい、又此外に

四、四時配當 之は昔述本の三教を次第の如く正像、末の三時に配當して時機相應の旨を談ずるのであります。が是れ尤も大切なことで、本宗が本門の教を末法の世に布くのも亦此意に依るのであります。

第四章 宗義 (下)

(一) 總論

さて愈々教義に移りますが、日蓮宗のやうに、分派が多く而かも、其分派が教義の上より分れ來りたる所の宗派にありては、單純教義の語を中々巧く往かず、殊に一派の

話せば一派の意見に違ふと云ふ様な墮梅で大に演者の迷惑を來す譯ですから、マア極々の骨筋ば、説明して其餘の所は改めて各派の諸師に任せやうと思ふ、じやから總論と茲に書いて置いても、或は教義の講釋をする全部が、尤で教義の總論と名づくべきものとなるかも知れぬ餘り不親切なとの様なれど實に己を得ぬから、マア其で我慢して貰ふにしたい。

それで、一口に本宗の教義を謂へば、唯釋迦牟尼如來の御眞意を世の中に宣揚して末法の衆生を救はうと云ふより外はない、尤も此意は何宗でも類に唱へて居るとなれど、淨土宗で謂ふ所の佛の眞意は、即ち阿彌陀如來の本願であるとのと、又眞言宗にては大日如來の御意を述ぶるのが佛の眞意であると申して居る様でありますけれども、彼等諸宗の主張する所は自分勝手な理屈を付けるのみで、實際お經文の上に其様などが明かになつては居りませぬ、處が本宗の宗義ばかりは其様な可怪なものではなく、顯然と法華經の上に明示になつたのである、夫を完全に明して、之を末法の衆生に傳へ、彼等をして成佛せしむると云ふのが、マア本宗の本意であります、併しながら、之を宣布する上に就いて、本宗にては攝受門と折伏門との二門を分ちて此二つの門から本宗の妙旨を宣へ出します、依て攝受折伏の二門を説明する必要があります。

(二) 攝折二門

抑々、攝受門と云ひ折伏門と申すものは、決して本宗の新發明ではなくて、何事をするに付けても必要なものであります、吾々が常に口にします所の破邪顯正の一句の如きも、マア折伏と攝受との二作用を言ひ顯はしたので、マア邪なもの破りたる上でなければ眞實の正道は立つことの出來ぬとの意であります、醫師が人間の身体を健康にするにも初めから滋養品などを賜めるばかりで、身体の病氣を治さなければ、身体が何の位、營養物を受け込んでも、皆病氣の爲に其營養分を打消されて了うて、何等の利益もなさなくては誠に無益のとであります、夫故に何事をするにも破ると立つるの二道は必要であるが、特に本宗の如き餘の諸宗を打破つて眞の佛意を衆生に知らしめんとする革進的宗教には此二門の必要なるとは勿論である、蓋折伏とは悪い法や悪い人等を折き伏せしむるとで若し他の人が誤つたとでもあつた時には少しの遠慮會釋もなしにとを論破して了ふのである、日蓮上人が四個格言を唱へて諸宗を屈伏せられたのは先づ、此法門に依つてせられたとに外ならない、又攝受と申すのは如何なるとかと謂へば、攝取受容の義と申して敵を破るとを主とせず、丁度安樂行品に、他人の長短を説かず云々とある如く、なるべく敵を寛容して往く手段である、夫故に此二つを備へて始めて宗教者の本分は立ちて往くべ

きものであれば本宗も此二つを離れて法を弘めはせぬけれども、但日蓮上人當時の形状は決して攝受門の様な手柔かな方法を以て、道を行ふべき時では御座いませぬ、何となれば、同く佛法の中に籍を掛けながら、佛如來の眞意も知らず、佛法の主旨をも知らず、或は一尙に念佛せよと勧め、或は只管に打坐せよと説き、各々自宗の思ふ儘に佛意を解釋して、世の人々を惑はし、眞實の妙法を聞かざらしむる人々が、諸方に跋扈して居る時であるから、我宗の妙旨を宣傳して世人を導かうとしても、是等の邪見者が種々と妨害を致して到底思ふ通りに參るものではない、夫故に何より先きに彼等の邪見を破し、邪なる宗義の旨を破折して、夫から後に眞實の佛意を説聞かせるのが、日蓮大士當時の急務であつたのです。されば、若此の間の消息を解したる人は、恐らく大士の唱導せられたる所の教義が、全く必然の手段に過ぎなかつたことを了解せらるゝであらうと思ふ、然らば、日蓮上人は此等の邪法と正法とを如何なる標準に依て判定せられたかと申すに、夫には

(三) 宗教五綱

と云ふとがあります、抑々宗教五綱とは、教機時國序の五つのものである、前に總論の處に於て豫て辨じて置きました、之は日蓮大士が『教機時國鈔』を申す書籍の中にも明しになりました、此五つを用ひて、完全なる日本の佛教と、不完全なる日本の佛教との區別を

付けるのが最も確かなる法であります、依て、少しく高祖上人の語を引用して、此五つを解釋しますれば、一に教とは、釋迦如來所説の一切の經律論、五千四十八卷、四百八十帙、天竺に流布すると一千年、佛滅後一千十五年に當りて震旦國に渡りたるもので、此一切經律論の中に小乘、大乘、權經、實經、顯教、密教等がありますが、是等を能く辨別せんければならぬ、二に機とは、一切衆生のとにて、之にも利根と鈍根の區別があつて、佛在世には利根の者が多かつたけれども、末法に至りては鈍根の者が多い、是等のとも注意せんければなりません、三に時とは、如來の滅後に正像末の三時があります、又大集經の説に依て見ると、五百歳と申しまして、佛滅後の二千五百年間を五個に分けてあります、第一の五百歳は解脫堅固、第二の五百歳は禪定堅固、第三の五百歳は讀誦多聞堅固、第四の五百歳は多造塔寺堅固、第五の五百歳は闍諍堅固、白法隱沒と、如斯なつて居りますが、ツマリ初めの中は佛法の内容が盛であつて次第に形式的に走り、遂に僧侶等が忍辱の衣を着ながら鬪争を始める様になると述べたものであります、諸君は、今日の佛教界を見て、此五百歳の時に思ひ至り、涙を出すことばありませぬか、四に國とは、日蓮上人の仰の如く、國には、寒國、熱國、貧國、富國、中國、邊國、大國、小國、一向偷盜の國、一向殺生の國、一向不孝の國等之あり、又、一向小乘の國、一向大乘の國、大小兼學の國ありて、種々に分別があるけれども、佛教は必ず國に依て之

を弘むべきものでありますから能く其國の形勢如何に注意せなければなりません。或は五に序即ち教法流布の先後とは上人の志趣にも必先（先づ）に弘（弘）る法を知つて後の法を弘むべし、先に小乗權大乘を弘めば後に必實大乘を弘むべし、先に實大乘を弘めば後に小乗權大乘を弘むべからざる通り、教法を布き弘めする順序を論ずるので世間の小學校の次に中學校あり、中學の次に高等學校、大學ありて、順次に高等の學術を教へ往くのと同様なことである。若し夫の順序を取違へて、大學の生徒をして小學校に入らしむる様なことがあつては實に無意味話と申さなければなりません。故に教法流布の先後も餘程注意せんければなりません。さて斯様に此の五つの標準を立て恰かも尺度を以て布を度る如く權衡を以て物品の重さを量る如く、キツパリと正邪の區別を立て適不適の程度を定めらるゝのが實に日蓮上人の志趣であります。其の標準に依て審査をして見ると、法華經が最上適當のものであるのじや、何故なれば總論の時にも話した通り、法華經は經中の第一であります。即ち教の上にて合格したもののじや、又日本の國の機根は利根ではなくして鈍根の者が多い高祖上人も國中の諸人、一切經の大小權實顯密の差別に迷つて一人に於ても生死を離るゝ者無之して結句は謗法の者と成れり、日本國の一切衆生は桓武天皇より以來四百餘年は一向に法華經の機也と仰せられてあるから、勿論法華經の功徳を被る

べき國民である是れ即ち法華經が第二の標準たる機にて合格したものである。夫から又日本國當世は如來滅後二千二百餘年（日蓮上人の時）後五百歲に當つて居るから法華經を廣宣施布する時であるとは論を待たぬ、即ち法華經は第三の標準たる時の上にて合格したるものである。次に又日本と云ふ國は如何なる法門を受くべき國であるかと云へば高祖上人が瑜伽論等を引いて御示しになりました通り、實に日本國は一向大乘の國也、大乘の中にも法華經の國となるべき國であります。是れ即ち法華經が第四の標準に於て適當なりと認められたる證據であります。又日本には如何なる教法が流布して居たかと問へば高祖が日本國には欽明天皇の御宇に佛法百濟國より渡る、始めて桓武天皇に至つて二百四十餘年の間、此國に小乗權大乘弘まる、桓武天皇の御宇に傳教大師有まして、小乗權大乘の義を破して法華經の實義を顯してより已來、又異義なく純一に法華經を信ずると申されし通り、日本には小乗權大乘より實大乘と次第順序を立て、弘まつて來た者故、愈々益々實大乘の法華の妙法を宣布すべき時であるのに、建仁より已來今に五十餘年の間、大日佛陀禪宗を弘め法然隆寛淨土宗を興し、實大乘を破して權宗に付き、一切經を捨て、教外を立つるが如きとがあるのは、實に前後を顛倒した方法と謂はなければなりません。されば是非とも本宗を興して法華の妙旨を弘め、實大乘の眞價を現し以て彼等權宗の輩を勸すべ

き場合でありますから、即ち本宗の勃興は、實に教法流布の先後と云へる第五の標準に於て、正しく合格したものである。斯く五の資格を具へた法華經であれば、高祖上人は、非常の力を揮つて之が流布に盡されましたが、其折伏の方面に於て、最も顯著なるものは彼の有名なる、

(四) 四箇格言

である。此四箇格言に就きては、一時明治の佛教界を曝したともありましたが之は、實に本宗の命脈とも頼むべき辭であるので、或宗の人などは之を蛇蝎の様に嫌ふけれども、捕縛せざるは餘程大切なものであると信じて居ります。何故なれば本宗は、他の諸宗の邪義を斥け、佛の正意に背きたる諸宗を排撃して、眞の佛知見を吾々衆生に示さうと云ふ目的にて興起つたものです。夫故に諸宗の妨害となるのは素より當然のことで、若し我等が諸宗の妨害を恐れて居たらば果して何事を爲し得ませうぞ、ルーテルは彼程の大革命を行つたけれども彼は決して他の妨害を恐れなかつたです。釋尊は外道よりの大迫害を受けなければも釋尊は決して彼様な小さな妨害には恐れなかつたので、遂に此の大なる佛法を作る事が出来たのです。徒に敵を恐れて何にしませうぞ、夫故に、敵方の陣營に切込むのは寧ろ吾人が自己の所信を貫く所の大々的主眼であるから、是非とも武器を揃へて置かねばな

らぬ。四箇格言は實に其武器であります。果して然らば自分の持つて居る武器を他人に示すのは何で悪いのですか、日本國が軍備を持つて居るのに之を國民にも外國にも見せず知らせずして置く必要が何處にあるか、吾人は其様な馬鹿げたとはあるまいと思ふ。今便宜の爲に妙滿寺派の起草員の原稿を茲に掲げて諸君の一覽に供するととし、拙稿は茲に迂曲しき説明を省します。

○總說——此四箇格言は、日蓮が本師釋尊より委付せられたる佛教統一の大任を果す爲に大聖疾呼せられし所なり。四箇格言とは念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道の説是なり。此四言互に通ずと雖、影響互現の格に順ひしものなり。則ち此四宗の長所に對し、大反對の破言を下せしものなり。

○念佛無間——とは畧言なり、詳しく云はば當世の念佛者は皆無間地獄に墮つべしとの意なり。此宗は機法の關係を誤解せり、則ち曼鸞は難行易行の二行を分ち、道綽は聖道淨土の二門を定め、善導は難行正行の二行を立て、法然は先師の諸説を綜合し尙且私意を添加し遂に捨閉開拋と云ひ、親鸞は頓證漸證の二證を立て、法華經等を聖道權化の方便と述ぶるに至る、斯く種々の分類を定められたれども、之を要するに機法の關係に迷惑せるの徒たるに過ぎず、法華經は法の眞要を明すのみならず、時機の關係を悉く示せり、然るに彼等は單

に法は高尙なるも機に適せずと断論せり、此れ實に彼等が千古の大誤謬なり、法華經に曰く「若人、不信毀謗此經、則斷一切世間佛種、乃至其人命終入阿鼻獄、」之に由て之を觀れば念佛無間の格言實に易ふべからざるものあるを知るべし、

○禪天魔——とは客言なり、詳く云は、禪宗は天魔の眷屬なりとの謂ひなり、此宗は可説不可説の關係を誤解せるなり、此宗の義に謂く、釋尊一代五十年間の諸説は皆是れ衆生の迷情に隨順して説く所の閑文字なり、眞實の悟道は言を以て宣べからず文字を以て傳ふべからず、佛陀の證智は以心傳心の方法に依らざれば受得すると能はず可説は方便なり不可説は眞實なり自己の心性を看破し來るに佛と均しくして異なるなし故に之を直指單傳の妙旨となす、斯の如く宗義を立つるは全く可説不可説の關係を知らざるの過なり、釋尊法華經に曰く我法妙難思、不可以言宣、是れ即ち不可説門なり、而るに舍利弗等の懇請に由り、後に之を宣べて曰く汝已惡慙三請、不止豈得不説、今諦聽善思念之、吾當爲汝分別解説、是れ則ち可説門なり、凡そ諸經に於いて不可説の後に必らず可説を開けり況や聲字實相一體の妙旨に達するときは文字即解脱の妙あり、佛涅槃經に文字を離れて解脱を説くべからずと佛意知るべきなり、暗禪の徒徒らに謂已均佛の慢幢高く遂に毘盧の頂上を踏んで行くと云ふが如き暴言を吐き聖教を以て譬を拭ひ聖像を焚て譬を燬ぶるに

至る其亂行言ふに忍ざるなり、聖主世尊涅槃經の遺賊に云、不隨順佛說者、悉是魔眷屬、と宗祖之に依て禪天魔論を主張せり、

○眞言亡國——とは客言なり、詳く云は、眞言宗は國家を亡ぼすの惡法と云ふとなり、此宗は顯密二教の關係を誤解し、釋迦大日の異同に迷惑せるなり、此の宗の義に云く、釋迦所説の一切經は悉く衆生の迷見に應同したる所の妄語なり、大日所説の大日經等の三部の經は大日如來の自證眞實の大法にして眞言なり、大日と釋迦とを比較せば其差天淵も密ならずと謂へり、弘法は法華經を論じて華嚴の下に置き、尙ほ奮して曰く如是一心無明邊域、非明分位矣、斯の如く宗義を立つるものは全く人師の執見にして聖教の本旨にあらず、(宗祖眞言見聞抄に顯密の關係等詳論し玉へり)之を要するに、此宗は一佛世界に二佛を構造して迷惑せしむ、夫れ信仰は精神界を支配するものなれば、世界の教主を捨て、種性曖昧なる構造佛を尊信せしむるときは、自國の君主を捨て、他國の驍者となるか如し、其國家の滅亡を來たすや必せり、佛法王法同契の旨趣より考察し來らば眞言亡國の義愈分明なるを知るべし、

○律國賊——とは謂く律宗の徒は國賊遊民なりとの意なり、此宗は戒律の本義に通達せざるの迷執なり、此宗義に謂く戒は佛教の根本なり、故に五戒十戒二百五十戒等を堅固に

奉持すべし、若し戒行なくんば餘法何の詮かあらん等と云ふ、然るに此宗の非義なる所以は、第一外相堅固を装ひ内實破戒の者多し、第二戒に小乘權大乘實大乘迹門本門の差別あるを分たずして小乘戒を以て大乘戒なりと諍ふ、第三此宗の戒は、傳教大師已に破し玉へるに之を隱蔽して世人を誑惑せり、第四四分律と梵網律とを混亂するの私曲あり、第五法華の大戒を盜むで却つて自宗の小戒の下に置くに至る、第六大乘流布の時機國去るに強ひて小戒を街ふ等の科あり、宗祖曰く傳教大師像法の末に出現して法華經の迹門の戒定慧の中圓頓戒壇を敷山に建立し給ふ時二百五十戒忽に捨擧る、隨て又墨具の末の南都の七大寺の一十四人、三百餘人も加判して大乘の人と成り、一國擧て小乘戒を捨擧ぬ、可見其受戒之書而今の邪智の持齊法師等昔し被捨し小乘戒を取出して一戒も不持名計りなる二百五十戒の法師有て公家武家を誑惑して國師と匂り剩へ發我慢大乘戒の人を破戒無戒と罵る、乃至涅槃經曰、我涅槃後無量百歲、四道聖人、悉皆涅槃、正法滅後於像法中當有比丘像似持律、少讀誦經、貪嗜飲食、長養其身、乃至離服袈裟、猶如惡師、細現徐行如猫、何鼠、外現賢善、内懷貪痴、如受啞法波羅門等、實非沙門、現沙門儀、邪見熾盛、誹謗正法等云々、斯の如く大乘の國を著はんとし、妄語嫉妬却て盛なり、之に依て律國賊の義を成ずるなり

尙ほ四箇格言の語尾に附するに、諸宗無得道法華獨得の成佛と謂ふを以てせり、是れ他な

し、前記四宗の外華嚴法相天台等も亦皆宗教五綱の準繩に照すに、或は淺深を誤解し、或は時機の適否を顛倒するあり、或は國風を斟酌せず、或は流布の序を亂る等の過失を生ずるなり、故に之を一括して無得道の破言を明表し、以て佛教界中に號令せしなり、

先、以上に於て本宗が如何に他の諸宗を非難して之を斥ふかと云ふとを明かに致しまし、たから是から進んで本宗大事の法門たる、

(五) 三大秘法

のとを説いて本宗の特色を示し、之にて此講義を結ばうと思ひます、所謂三大秘法とは一に本門の本尊、二に本門の題目、三に本門の戒壇、是を委細に説明すれば、八年でも十年でも脱き盡すとは出来なけれども、略して申せば、先、本尊を定むるは、自己の心を攝めて餘念なからしむる所の對象である、又題目修行を立てたのは、智慧を研く爲である、又戒壇は身を整ふる道であります、即ち、三學の中にて論ずれば、本尊は定に當り、題目は慧に當り、戒壇は戒に當ります、又三業の上にては、本尊は意、題目は口、戒壇は身、とキツ、バ、當て符はるとが出来ますから、此三つを以て佛道修行の通軌とするとは明かであるが、其中でも特更に本門の二字を付けてあるのは、妙法蓮華經の五字を跡として、其中でも更に本述二門の中の本門を取るとを示したものであります、依て、今此本門の三大秘法に就て一寸説明せん

とするに實は之に四種の解き様がありまして即ち妙解の三秘妙行の三秘類通の三秘妙證の三秘是だけです然るに是等のとを一々説明するも容易ならぬとゆゑ今は妙解の三秘に付いて少しく詳い説明をなし其他の三つは極簡單に述べて置かうと思ひます先づ本門の本尊とは我宗の修行者が歸依する所の佛様の身軀にて本宗の寺院にては大抵安置してあります但其形狀は周圍にゾウツと佛界から地獄界までの形狀を書き列ぬ其中央に妙法蓮華經の五字を書きたる十界顯誦の曼荼羅で御座います元來此曼荼羅は何を顯してあるかと謂ふに無作三身の佛の形狀を示したもので佛の身軀は十方法界の五大を以て法身の體とし十方法界の五蘊を以て報身の性とし十方法界の一切衆生の六根を以て應身の相とし一切衆生の動作を佛の力作と致し十方賢聖の智慧徳相や諸佛の成道を佛の神通とし十方法界の國土を佛の住居として居らるゝから之を放てば六合に滿ち之を縮むれば退いて密に隠るゝと云ふ様に不生不滅無量無邊の形狀を殘らず此一枚の曼荼羅に攝め盡してあるのじやから此曼荼羅は決して佛様に限つたものではない我等一切衆生も山川草木も悉皆此曼荼羅の本體たるのであるされば僅一枚の曼陀羅でも其顯はす處は本宗の深妙なる圓理である實に本宗の本尊として最も適當の者と謂はなければなりませぬ此曼荼羅のとに付き法界自然の曼荼羅盤山顯現の曼荼羅道場莊嚴の曼

荼羅行者心具の曼荼羅の四種がありますが今は容して置きませう但し曼荼羅の顯名のとは眞言宗の處に出て居る筈ゆゑ夫を御覽下されば分ります次に本門の題目とは南無妙法蓮華經の七字を口に唱ふるとにて妙法蓮華經の五字は法華經二十八品の題號であるから之を題目と名けたのであれ其實は一切經の神靈である乃で其五字に歸依するのを南無妙法蓮華經と申したのであります前から申す通り妙法蓮華經の五字は一代佛教の精要で森羅萬象の原理は皆此中に攝せられたのであれば一たび之に歸依する時は十界三千の依正を擧つて十界依正の代表者たる題目に歸依するとなるのでありますから我等が之に歸依すと云ふのもツマリ妙法の心を以て心の妙法に歸依する外はないのであります誠に僅七字の題目も如斯研究して見れば謂ふに謂はれぬ功徳を備へて居るとが解りませう夫から次に本門の戒壇とは別に觀瀝しい戒律を持つとでもない唯妙法蓮華經の五字を直に本門の戒躰と致すのみです故に此五字に歸依して之を受持して行くのが即ち無作の圓頓戒でありますさりとて本宗では他の戒を棄つるのでは無い此五字を受持する中に十戒も四十八戒も皆具足して居るので所謂五字の題目を擧げて一切の戒を攝するの意であるが併し其戒法の解釋に付ては日蓮大士が「本門戒躰抄」の中に説かれた如く律宗などの人等が主張する所と違うて嚴に本門の戒躰を取らるゝのである

から他に戒法等と混同しては大變な誤謬でありまず先づ斯様に三秘の事を明して参り
ましたから粗三秘のとはお解りになりましたらうが要するに本宗に於ては、何事に付
ても法華經の範圍内に諸有一切の佛も法も觀法も殘らず攝め盡し妙法蓮華經の五字の
外に一物の見るべきないと主義として居るので此標的に依て一切の經文を解釋し諸
行を行つて参るのですから、立教開宗の本意も其實行の方面も殆んど一致して居る誠
巧妙な立教法であると申さなければなりません。又此次に妙行の三秘と云ふのがあ
るが之は常は身は是れ本佛なりと念ずるのが本門の本尊で、心は是れ妙法なりと念ずるが本
門の題目で、住處は是れ寂光淨土なりと念ずるのが本門の戒壇である。又類通の三秘とは
佛法僧の三寶、戒定慧の三學、法身般若解脱の三德等が、本門の三秘に類して居るゆゑ假に
類通の三秘と稱けて用ふるのである。又妙證の三秘とは我等の身軀が即ち本有無作の三
身であると證するのを本門の本尊の妙證とし、我等の一心に三諦三觀の顯るゝのを本門題
目の妙證とし、我等の住處が直に常寂光土と證するのが本門戒壇の妙證である。斯様な細論
の邊に至つては此の短い紙上に書き盡すことが出来ぬに依て最早之で止めに致し詳細は
諸君が根本的に研究をなさるゝ時に譲らうと思ひます。

第五章 結論

以上本宗の綱要を辨じ終りました。唯諸君に乞はんと欲する所は、徒に其形式を見ず、其精
神を見て貰ひたいものであります。抑々日蓮上人は空前の抱負を有て、天下の邪法を退治
し佛出世の本懷たる法華經を宇内に宣布せん爲に非常の力を盡されました。實に感服す
べきとである。然れば、其の流れを汲みて、法華經の妙味に飽滿しつゝある我等は、非常の力
を盡して宗祖上人の思召に協ふ様にせんければなりません。徒に偷安姑息の手段を取
つて沈黙するばかりが宗教家の本分でもなければ、本宗徒の本分でもない。機宜に乗じて
は四個格言も可なり、佛教統一論も可なりです。禪宗が坐禪を佛の正意なりと論ずる。此方
には法華を以て佛の正意なりと主張する本宗がある。念佛を以て佛の正意とする淨土門
の此方には大日如來を擔ぎ廻る眞言宗がある。斯く紛々擾々たる有様では佛教の統一は
何時出来やうぞ。本宗の徒は宜しく法華の明示に従つて大なる志望を遂げ、以て佛の洪
恩に酬い、高祖上人の志意に酬いんければならぬのである。さりながら、尤も悲べきとは現
今の日本にある本宗の僧侶諸君、中此等の問題に付いて精細なる研究をなす者が少く、單
に我慢を張るのを本宗の正意と誤解し、却つて天下の諍笑柄となるとが少からず、其が爲

に日蓮上人の光明を増さずして寧ろ毀損致し世の日蓮大士の傳記を詳讀せざるものをして何となく悪感情を高祖上人の身に抱かしむるやうになりましたのは眞に悲憤の至りに堪へぬとであります。今や佛教界は多事の時です。眞に科學の素養ありて深く佛教の研究に志ある人は勉めて本宗を學び日蓮大士の本意と佛の正意とに犀利の眼光を注がれますやうに願ひたいものである。若し左様云ふとが出来なかつたならば今の日蓮宗徒は高祖大士に對して反つて非常の大罪を犯すものと申さなければならぬ。マア餘計などは宜い加減にして之で本宗綱要の講義は完結と致します。

日蓮宗綱要 畢

明治卅二年五月十九日初 版
 明治卅三年十月三十日再版分本

發行者 今村 金治郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷者 山本 鏌次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英 舍

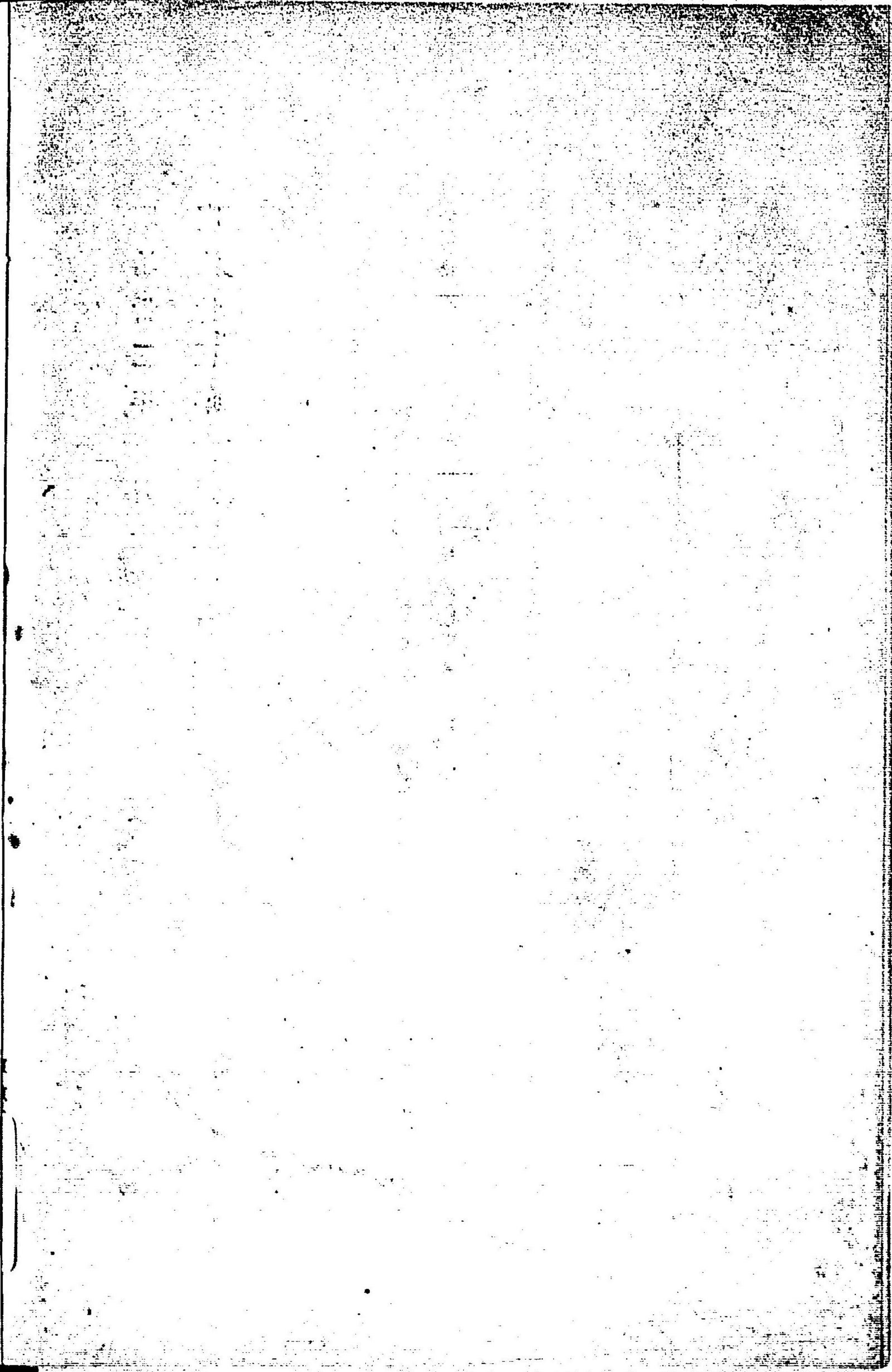
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地



發行所

東京市芝區
露月町十八番地

鴻 盟 社



[Redacted]

特45

564

日蓮宗綱要

国立国会図書館

020020-000-4

特45-564

日蓮宗綱要

河合 日辰/著

M33.10

ABH-0186

